

「学生時代から考えていたこと」 黒 保嘉（1986年度修了 ㈱山下設計 本社 建築設計部）

□ 建築家「磯崎新」氏が考えていたこと

いみしくも、この文章を書いているときに日経新聞の月間連載記事「私の履歴書」にて、建築家「磯崎新」氏が執筆しています。磯崎氏の自己の生い立ち、師と仰ぐ丹下研究室での活動、建築や他分野の人々との出会いを経て現在に至る過程を、氏らしく半ば自虐的な側面を見せながら詳細に述べていますが、その中で、自身の作品についてはそれ程多く語らず、むしろその過程で関係した「ひとびと」とのつながりや活動とその結果に紙面の多くを割いているのが印象的でした。

□ コンペや研究をしながら考えていたこと

図らずとも学生時代に、「自分」～「ひと」～「チーム」のつながりについて考えるよき場を与えられました。高専時代から建築設計競技（いわゆるコンペ）にエントリーしましたが、この勝率をいかに上げるかに日夜研鑽したことはいまだに忘れることができません。コンペや研究の締め切りが重なると徹夜の連続は当たり前。しまいには渡邊研究室から事務室へコピーをとりに行くのに階段をまともにも上がれなくなったことを思い出します。このような生活において実にいろいろな「ひとびと」とのめぐり合いがあり、苦難ではありましたが共有できた心温まる楽しみもありました。

□ 「ひと」とのつながりで得られたもの

このような技科大での活動で得られた最高の成果は、自分ひとりだけでなく、志を共有できる「ひと」、尊敬できる「ひと」との出会いがあり、その「ひと」たちとのつながりの中で共働したコンペや研究が社会で評価され、現在もそのひとたちとおつきあいをさせていただいていることです。

□ 社会でもやはり「ひと」とのつながりでした

卒業後、組織事務所へ入社しましたが、そこでの仕事は研究室と大差がないのが幸いでした。入社先が学部4年時の実務訓練先と同じであったため、その時の指導者が入社時の直属の上司としてしばらく一緒に仕事をする機会を与えられ、その上司はやがて社長となり今年から会長となりました。ここでも実にあらゆる分野の「ひと」との出会いや強いつながりがあったことは言うまでもありません。

□ 「六本木ヒルズ」で実践できたこと

ここでご紹介させていただくのは、様々なメディアで報道されている「六本木ヒルズ」です。この建物の設計には、小生のみならず国内外の10社を超えるパートナーとして専門家、デザイナー、大学の先生方とのコラボレーションを通じて行い、極端に短いスケジュールの中で自己主張に走らずお互いのアイデアを高めることに努力を図りながら、結果として環境技術面での社会的な評価を得つつあります。その中でも特に、屋上に設置した制震装置を「屋上緑化」として活用する新技術をクライアントとともに新たに開発し、ヒルズ内のオフィスワーカーだけでなく日々地域のひとびとが生活の場として過ごせるようになりました。さらに、毎年、高校生が修学旅行中に、ヒルズを設計した人に直接会い話を聞きたいとの希望を持ちわざわざ遠路来社してくれています。

□ 「Regional Planning」を今後も忘れずにしたい

建設工学系に所属していた時に研究室で建築の研究や設計をしながら「Regional Planning」ということが常に頭の片隅にありました。今から思えば地域社会（ひとびとのコミュニティ）との接点を模索しながら建築を考えていたような気がします。これからも、母校で体得した原体験ともいえる考え方を生かしつつ、結果として時代が求める社会資本となる建築を生み出すことが自らの望みでもあり誇りとしたいです。



■ 六本木ヒルズの屋上庭園はその荷重が制震装置として機能し、その田畑で地域の子供たちが田植えをし、毎年、秋に六本木米を収穫します。

